田能村竹田「瘞紅碑(えいこうのひ)」の場所論的分析

荒木　正見

序

広島県尾道市千光寺（真言宗）境内にある瘞紅碑(えいこうのひ)は、田能村竹田（一七七七―一八三五）が、天保五年（一八三四）に当地で地元文化人と交流した際、活花に使用した草花を埋め、詩を創って奉ったものである。この碑文は、文化文政期の文化の影響下にあった当時の尾道に表れた風流を象徴するものだという評価が専らであった。しかし、その碑文の持つ哀切感と微妙な感情には、単に、活花に利用した草花を埋め悼んだというだけではない特殊な理由や深い理由があると思われる。それは、田能村竹田自身に関する理由もあると思われるが、他方、その碑に併記された尾道の文化人および商人の手になる碑文からは、当時の尾道の側にもこのような碑を建立すべき理由があるとも思われる。小論は、その理由について双方向的な側面から明らかにする試みである。

なお、引用の際、旧字旧仮名を現代のものに直した箇所がある。

第一章　瘞紅碑の碑文と場所のダイナミズム

まず、瘞紅碑の碑文の冒頭には、田能村竹田によって次のように記されている。

「　　題瘞紅碑

天保甲午八月朔　埋瓶花枯枝一束於黄薇玉浦之千光寺側　謀立斯石　各録詩若詞代銘

芳魂葬処草芋綿　粉尽紅消風悄然　身後自今三尺石　生前憶昨半瓶泉　幸教名士鐫佳句　喜向禅門寄墓田　休笑嚢空無酒酹　朝来醵得有青銭」（大分県教育庁管理部文化課編『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　詩文篇』大分県教育委員会、平成四年、六五八頁）

[天保甲午(一八三四年)八月ついたち。瓶花(へいか)枯枝一束を黄薇（備後国）玉の浦（尾道）の千光寺側に埋め、斯の石を立つることを謀り、各々詩もしくは詞を録して銘に代える。

芳魂　葬る処　草芋綿(せんめん)　粉(ふん)は尽き　紅は消えて
　風悄然たり

身後（死んだ後は）　今より三尺の石　生前　むかしを憶う半瓶の泉

幸（ねがわくば）名士をして佳句を鐫(ほ)ら教(し)めん　喜んで禅門に向（お）いて墓田(墓地)を寄す

笑うを休(や)めよ　嚢(袋)空しく　酒酹(しゅらい＝酒を注いで祭

ること)無きを

朝来(朝から)　醵(きょ)し(金を出し合って酒を買う)得て　青銭(青銅の硬貨＝寛永通宝)あり」

端的に言えば、この碑は、活花に用いた後枯れた草花を埋め、詩や言葉を捧げ、酒を奉って祭ったというものである。豊後竹田に住み、各地をめぐった文人画家、田能村竹田と彼を厚遇した尾道商人たちの風流を示すものとして今日に語り継がれている。

ところで、そのような風流ではすまされないのが、碑文にも記されているように、この碑の墓石としての意味である。草花の墓石という特異なものには、真摯に悼むという意味から、風流な遊び心まで、多種多様な意味が考えられる。小論では、その意味を明らかにしようとするものである。

考察の手順としては、まず、文学研究の常識的な方法として、田能村竹田の当時の状況を確認して、碑の意味を探る手がかりとする。次に、それが尾道という場所に建立されたということ、また、碑そのものにも尾道商人の碑文を併記したということなどから、尾道の側の状況も考慮すべきではないかと考えられる。

すなわち、田能村竹田が碑文を寄せ、この碑が建立されたのが、一個の事実ならば、その碑をめぐる尾道の事情は、尾道という場所の側からの働きかけである。これらの双方の働きかけは、本来、独立に行われているものである。例えば、田能村竹田にとってこの碑は尾道でなくてもよかったかもしれないし、尾道にとっても、田能村竹田の碑でなくてもよかったかもしれない。哲学的場所論の一端から言えば、個と場所との、引き付け合い反発するダイナミズムがある必然性を持った時、ひとつの事柄の成立をみる。小論では、このような視点から問題を整理し考察する。ところで、このような、個人的な表現や行為と、その背景となる場所の問題とは、相互に影響しあってひとつの事実を構成するものである。このような発想は、哲学的場所論によって裏付けられる。

小論では、他の拙論同様、根底的な場所論として、西田幾多郎の場所論の構造を、西田幾多郎の論文「場所」(大正一五年・『西田幾多郎全集　第四巻』岩波書店、一九四九年／一九八八年)などに基づいて以下の各点に要約した。なお、中村元監修・峰島旭雄責任編集『比較思想事典』(東京書籍、二〇〇〇年)において筆者が簡潔にまとめた拙筆項目「場所［現代思想］」(四一二―四一三頁)を参照した。

(一)場所とは、古来哲学のテーマのひとつである唯一絶対無限な存在の名称である(場所の唯一絶対無限性)。

(二)場所は一般的(普遍的)なものと特殊なものとの合一である。従って、我々が認識して言葉に発することができる総ての事柄(特殊なもの)を包み込む。

(三)特殊なもののみ認識できる我々にとっては、場所は全体としては「無」として認識される。そして、すべての事柄はその無から現れるようにして認識される。これは、場所という唯一絶対の存在から言えば、たったひとつの有機的存在である場所自身が自己分化することである。つまり、どのような事柄も、例えば特定の人物であれ、特定の事実であれ、物理的現象であれ、空想であれ、夢や理想や愛であれ、すべて場所自身の自己分化、もしくは自己限定である(場所の自己限定)。

(四)特殊なものや個物も本来は普遍的な場所自身ではあるが、場

所そのものは「無」として認識されるべきものなので、それら特殊や個物は、場所を表現し、それらの発展なしには普遍的な場所の発展はない（個による場所の限定）。

（五）このように、それら特殊や個が存在しないと普遍的な場所も存在しないし、逆に、普遍的な場所が存在しないと特殊や個も存在しない。それらは、相互に限定しつつ発展していくが、その発展の過程が総合的に示されるのが歴史である（場所の歴史性）。

このように西田幾多郎の理論は哲学的なだけに、普遍的な存在を主な問題とするが、普遍的だということは、この構造は特定の場所におけるさまざまな事柄を問題にする場合も有効だといえる。

このような、最終的には歴史の意味に表現されている相互作用に着目すれば、そこには、場所に関するダイナミズムが示されることになる。小論では特に、このような場所に関するダイナミズムに注目しつつ分析することになる。

第二章　天保五年の田能村竹田

この碑を建立した天保五年の田能村竹田の状況は、その人生を考える時、ひとつの節目にさしかかっていたといえる。

まず、尾道との関係で言えば、五九年の彼の生涯で、三回の尾道訪問のうち、これが結果的に最後の訪問になったということである。天保五年二月六日の高橋草坪宛の書簡で、天保四年十一月二十一日に豊後竹田を発ち、天保五年二月二日に尾道に着いたと記しているように（大分県教育庁管理部文化課編『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』大分県教育委員会、平成四年、二一四頁）、二月はじめに尾道に着き、また、天保五年九月八日の後藤碩田宛の「浪華にて啓上」と始まる書簡に、尾道で二百余日をすごし、八月二十六日に大阪に着いたことを記しているように（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』二二三頁）、八月末に大阪に発つまでの約半年という長い滞在の間、竹田は、存分に地元の商人や文化人と交わった。

天保五年三月二八日の田能村如仙(太一)宛の書簡では、「竹下・夢研・虎道諸兄、何れ依然尋(つぎ)ニ旧盟一、日々集会相楽候。」（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』二一五頁）と述べ、六月一六日の高橋草坪宛の書簡では、「灰吉（竹下）・油屋（夢研）抔（など）、此節は大に詩にこり、毎日終日詩作詩論にて、詩会も四五日位に仕候処抔（など）ゆへ、馳走も相応には御座候、大におもしろく御座候。」（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』二二一頁）と記している。

しかし、その楽しさには一抹の影があったことも感じられる。天保五年二月六日の高橋草坪宛の書簡によれば、「去年ハ大幸之年に而賢兄と太一と両人の命を拾い取候」（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』二一四頁）と記しているのである。友人の健康を祝う書簡にあえて自分の後継ぎの健康を付加したのには、よほどの思いがあったといえよう。

それはおおむね次の状況であった。天保四年七月五日の在京の医師、小石檉（てい）園（元瑞、秋巌）への書状で、太一の病状に対して処方してもらったことへの感謝を述べているように（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』二〇四頁）、田能村家の後継ぎとして、京で文政六年（一八二三）から天保四年（一八三三）

まで医学の修行をし、ようやく成し遂げて帰郷した太一は、この年六月に、天然痘と思われる病に襲われたとされる（宗像健一『大分県先哲叢書　田能村竹田』大分県教育委員会、平成五年、二九五頁）。その後の小石樫園宛の書状からは、病状は一進一退で、父親としては心の休まる間もないことが伺える。結局、とりあえず回復したのが、天保四年一一月五日の帆足杏雨宛の書簡に「太一も段々全快仕候、頃日より出勤仕居候。」（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』二一一頁）とあるように、約半年後であった。

このように、わが子、それも後継ぎの重病を乗り越えた最初の旅が、この尾道を経て関西に赴く旅であった。

ところで、この太一の重病を心配する気持ちには伏線があった。それは、天保三年九月二三日の頼山陽（一七八〇―一八三二）の逝去である。同世代の友人でもあり、田能村竹田を世に出さしめた恩人でもある頼山陽は、田能村竹田から京都にいる田能村如仙に宛てた天保三年七月二八日の書簡で、「山陽兄大不快のよし如何ヤ承度（たく）候しかし」（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』一八六頁）と記しているように、六月ころから喀血し重病の床についたのであった。

田能村竹田は早速見舞いの旅の計画をたて天保三年九月に豊後竹田を出発する。ところが、急遽上洛するということではなく、例によって、各地で見物し詩作し土地の知人と交遊するといった旅であった。結局、いまだ豊後中津にいるときに頼山陽の訃報が届くことになる。しかしここでもすぐに行動を起こすでもなく、下関では、天保四年一月二七日の安東春台宛の書簡に「日夜画事討論」（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』一九五頁）と記したり、同三月一〇日の馬場謹二宛の書簡に、専念寺の桜を詠って「さくら花来る人ことにへだてなく神の心を見する色かな」（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』一九六頁）と記したりするように、交友や花見を楽しみ、ようやく、三月二一日に頼山陽宅、山紫水明処に到着している。

この行動は一見、頼山陽をないがしろにしているようにもとれるが、反面、別の次元で悼んでもいる。

天保四年四月一二日の伊藤樵渓宛の書簡には「京師も頼山陽没後大ニ寂寥の様子に御座候」『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』一九七頁）と述べている。

そして、『竹田遺稿』巻三に収められている「宿頼山陽山紫水明処　子没後八閲月」（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　詩文篇』四六九頁）では、次のように詠われている。

「重叩柴門感曷勝　一声認得内人膺　亭依水処昔同座　欄凝紫時今独憑　荒径春残花地落　虚堂昼暗壁挑灯　老来怕聴傷心話　使我観空欲学僧」（注　六字目の曷は、『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　詩文篇』四六九頁では未詳となっているが、宗像健一『大分県先哲叢書　田能村竹田』二九三頁では、曷が補われている。）

「重（ふたたび）柴門を叩くに感曷（なん）ぞ勝（た）えん　一声認め得たり内人膺（おう）ず　亭の水に依る処昔同（とも）に座し　欄の紫に凝る時今独り憑（よ）る　荒径春残り花地に落ちる　虚堂昼暗く壁に灯を挑（かか）ぐ　老来心を傷ましむる話を聴かんことを怕れ　我をして空を観じて僧に学ぶを欲せしむ」

この詩に見られるように、頼山陽の没後八ヶ月にして悼むに当たり、田能村竹田は、前半は山紫水明処に過去を辿り風景に寂寥を詠っ

ているのにもかかわらず、詩の最後には自分の心の問題を重ねている。もちろん、そのようにしてまで、頼山陽の死を悼んでいるともとれようが、ここに、先に述べた、なかなか上洛しなかった行動や、また、あえて彼の死のために献詩しなかったことなどを重ねると、どこか臆病ともいえる性格が浮かび上がってくる。すなわち、頼山陽の死を悼むということに加えて、死そのものを直視することに敏感に反応しているような印象を与える。

例えば、『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　詩文篇』二六六頁では、文政六年もしくは九年頃に編まれたのではないかとされる『竹田歌集』所収の「山の庵にこもりける頃物のあはれにおほへける折々によみける歌」の中でも「年をへて身につむことのおほけれハ老ての後そ物ハかなしき」（二七八頁）や、『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　詩文篇』二八二頁に、明治一六年一二月、伊藤禎三郎が整理したとされる『竹田先生歌集』所収の作歌時期ははっきりしないがおそらくは晩年の作であろう「今朝春と立つも懶（ものう）し年毎に老のおも荷をつみてふる身は」（三〇九頁）のように、老いに対する寂しさや気の弱さを覗わせる作品からも、迫る死に対する不安が感じられる。

このような感情が彼の人生の基調にあったことは、彼が自らを「廃疾の民」と呼び、二、三歳のころからずっと眼病、耳症などに悩まされ、結局、文化一〇年（一八一三）に、三七歳にして隠居したことからも明らかである。宗像健一『大分県先哲叢書　田能村竹田』三六頁では、その病気は先天性糖尿病であったと推測されている。

その一貫した不安は、自らが老いてきたというだけではなく、例えば天保四年（一八三三）一月二七日に安東春台に送った書簡に「去年は、朋友共大分地下に帰（きし）候。」と述べ、頼山陽を始めとする知人が目下「半死」であると述べ、「筑前仙崖抔（など）も、折〻筆書画止め候由、何分世界寥々」と述べているように（『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』一九五頁）、友人、知己の老化や死去も身に迫っていることで増幅していた。その中で出会った頼山陽の死に、彼は他の人たちとは次元の違う反応を示したといえよう。

そして、太一の重病は、その直後であった。医学修行を終えて先に帰郷した太一の発病を田能村竹田は、頼山陽遺宅を訪れたこの一連の旅の中で受け取るという状況であった。

幸いにして太一の回復をみて、太一が勤務に復帰するや否や、溜まっていた出版の話などの件で再び関西を目指したのが、瘞紅碑にまつわる最後の尾道訪問となったのである。

以上のことから、田能村竹田の中に、これまで楽しんできた活花の結果、枯れていった草花を悼もうという気持ちが生じたのは当然であろう。しかし、碑文の後半からも明らかなように、単に哀悼するばかりではない。前半の哀悼から立直ってまた新しい、そして永遠の生を得たことを示唆しているのが碑文の後半である。これらが、直接的には太一の回復やそれによって再び得た安定的な気持ちを反映していると言えようし、そして同時に、それを墓石として刻むことで、幼い時から囚われてきた死への恐怖に決着をつけ、超越しようとしたものともいえよう。

なお、この超越に関しては、晩年に自画像と思われる何枚かの画に添えた「不死吟」が挙げられる。それは、以下のような詩である。

「一昨不死又昨日。昨日不死又今日。今日不死又明日。若許不死日又日。騰々不死踏尽今年三百六十日。又明年之三百六十日。」

［一昨死なず又昨日も。昨日死なず又今日も。今日死なず又明日も。若し死なざるを許されるなら日に又日ならん。騰々（とうとう）として死なざれば、今年の三百六十日を踏み尽くし。又明年の三百六十日も。］

このように考えてくると、瘞紅碑における田能村竹田の詩の意味構造を省みれば、当時の個人的心境が素直に反映されているといえる。

「生前憶昨半瓶泉」までは、死を悼む意味合いが濃いが、そこからはむしろ、現世の明るさが見られる。すなわち「喜向禅門寄墓田」からは、墓石を立て供養することで悲しみを超越し、そのことで現世の楽しみとしようとするものである。

このような心境の流れは、基底に自己自身の死や病の恐怖を抱えて生きてきて、晩年に至って、親友、知己の死や病に会って増幅したばかりか、跡継ぎの重病という危機にまで至ってどん底を味わい、しかしその後、太一の回復で希望を得ると同時に死や病に対する長い間の恐怖を諦観し超越するに至った人生の流れと共鳴するのである。

さて、田能村竹田に関しては以上の解釈が成り立つといえるが、実は、この碑にはそれに続いて、尾道の豪商橋本竹下の詩文も刻んである。田能村竹田の事情が、この碑における固有の意味の中核を成すものとして、尾道という場所に働きかけるダイナミズムを意味するならば、尾道の商人たちの事情は田能村竹田に働きかける場所の側からのダイナミズムを意味するといえよう。次章ではそれを考察する。

第三章　天保五年の尾道

橋本竹下になる碑文とその詩の概要は次の通りである。

「花之親人是瓶花　簾前侍立似嬌娃　自将開落付君手　献媚肯向別人家

常見世間軽薄児　青銭擲下買花枝　花未全萎拚藩涵　余芳長抱終古恨

才子憐花思匪夷　花亦相依如于帰　朝朝分与満瓶水　毎枝一老魂一飛

乃聚枯槁手観束　番番春風仔細録　詩人会葬古道場　縦不玉棺死非辱

涙痕洒成瘞紅篇　貞珉三尺白峨然　果是芳魂得解脱　浄土重開五色蓮」

［花の人に親しむは是れ瓶花なり　簾前（れんぜん）して侍立すること嬌娃に似たり

自（みずから）将（まさに）開落は君の手に付（ゆだねる）

媚を献じ肯（あえて）別人の家に向かう

常に見る世間の軽薄児　青銭擲下し花枝を買う

花未（いまだ）全（すべて）萎（なえざるに）藩涵に拚（すてる）

余芳は長（とこしえに）終古の恨みを抱く

才子花を憐れむに思いは匪夷（たいらかならず）

花も亦（また）相依りて于帰（ゆきかえる）如し　朝朝分与して瓶水を満たし

毎枝一（ひとたび）老いては魂一（ひとたび）飛ぶ

乃（すなわち）枯槁（ここう＝枯枝）を聚（あつめて）手に束ぬるを観る
番番の春風仔細に録す　詩人は古道場に会葬し
縦（たとえ）玉棺ならずとも死して辱かしめず
涙痕洒（あらい）瘞紅篇を成す　貞珉三尺白峨然
果たして是で芳魂は解脱を得たり　浄土は重（ふたたび）五色の蓮を開かせる」

「花が人に親しむのは瓶の活花だ。花はまるで美人のようだ。軽輩のものは時に、花の残り香があるうちに捨てたりする。風流を解するものは、それを可哀想に思い、毎朝水を注ぎ、枝ひとつ老いるごとに魂が傷む。そこで枯れ花を集め束ねる。春風は吹くたびに花の命をよく知っている。詩人は、この花の亡骸を皆で葬る。これは立派な墓とはいえないが、死を辱めるものではない。涙をもって瘞紅の詩篇を作った。墓石は三尺で白く輝いている。これで美しい花の魂は解脱し、浄土で五色の蓮として再び咲いてくれるだろう。」

さて、田能村竹田の碑文と、橋本竹下の碑文とを比較すると、当然、基本的には共通点が多い。すなわち、おおまかな意味として花を悼むことはこの場合の要点であるので共通なのは当然である。しかし、その悼み方に両者の違いが指摘される。

田能村竹田が「休笑囊空無酒酹　朝来醵得有青銭」と、先に述べたように現世の側で一層の供養ができると展開しているのに比して、橋本竹下の碑文では、「果是芳魂得解脱　浄土重開五色蓮」と、成仏したのちの平穏を祈っているのである。

この点に関しては、橋本竹下そのひとの特殊性と、尾道という場所の双方からの考察が求められるが、実はこの場合双方はともに絡み合っていると考えられる。

青木茂編『新修　尾道市史　第六巻』（尾道市役所、昭和五二年）によると、橋本竹下については次のように述べられている。

「橋本竹下　諱は徳聴、名は旋、字は元吉、通称吉兵衛といい、後荘右衛門と改む。竹下は其の号、三原町川口家の生れ、橋本家を嗣ぐ、学を好み詩文を能くす。風流洒落（しゃれ）君子の称あり。初め菅茶山に学び後京都に出で、山陽に学ぶ。文久二年（一八六二）三月四日歿す。慈観寺に葬る。」（三五九頁）

このうち、小論と特に関係の深い事柄は、慈観寺という寺院である。

今日、尾道市長江一丁目四―七にある、時宗の慈観寺を訪れると、立派な本堂が目に入る。欄間などの彫刻も丁寧に作られているが、『新修　尾道市史　第六巻』によれば、この本堂は「天保五年（一八三四）起工、同八年竣工したいわゆる慈善事業としての建築であった」（七〇頁）とされている。まさに瘞紅碑が建立されたその年、慈観寺本堂が慈善事業として起工されたというのは、どのような事情によるものであろうか。

その事情とは飢饉である。

『新修　尾道市史　第六巻』所収の資料「橋本年誌」によると、文政一三年（一八三〇＝一二月一〇日に天保に改元）には、それまで尾道で取り扱われていた煙草が、隣国の福山での取り扱い量が増えて圧迫されていることや、反面、尾道製の櫓が好評なので、当地で統一して製作販売できないか、などの、産業構造の変化を覗わせる記述があるが（五七四―五七六頁）、その翌年、天保二年（一八三一）には、「覚」として、「昨冬以来米価追々高値に相成り」と述

べられ、手当て米として千石を支給してほしい旨記されているのである（五七六―五七七頁）。このような米の不作から、先の産業構造の変化も、むしろ切羽詰ったものだったことが推測できる。事実、文政一〇年（一八二七）には、幕府が倹約令を発令しているし、シーボルト事件の起こった翌文政一一年（一八二八）には、日本各地で風水害が相次ぎ、越後国大地震が起こり、越後では打ち毀しが勃発している。翌文政一二年（一八二九）には江戸大火も加わって、世情不安が増し、文政一三年（一八三〇）には、京都大地震が起こって、各地で一揆が頻発している。

このような世間の飢饉は、当寺の尾道の規模や産業構造を考えると、比較的ゆるやかに訪れたとは考えられる。例えば、田能村竹田は『屠赤小瑣々録』（屠赤水＝屠隆、明代末期文学者との関係？）という文化四年（一八〇七）頃から天保四年（一八三三）頃までの忘備録を残しているが、巻四で尾道については「浪華以西殷富（いんぷ）の地」（大分県教育庁管理部文化課編『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　著述篇』大分県教育委員会、平成四年、一四六頁）と述べられ、さまざまなデータを記してあるが、実はそのデータは、文化一三年（一八一六）に尾道の亀山士綱が記した『尾道志稿』からの借用である。そこで『尾道志稿』によれば、久保、十四日、土堂の三町で人口は「九千四百八十八　内、男四千七百三十二　女四千六百七十四　僧六十七　尼十五」（亀山士綱『尾道志稿』文化一三年、翻刻版＝備後郷土史会、昭和九年、九―一〇頁）とある。特記された僧と尼の約一割弱という数は注目に値する。また、同書によれば、「船問屋　四十八軒。　酒造家　十一軒」（『尾道志稿』翻刻版、七頁）とされ、「舟船　二百三十五艘」（『尾道志稿』翻刻版、一〇頁）と記されている。記される限りにおいては、瀬戸内を代表する豊かな港町である。

しかし、それでも「橋本年誌」によると、やはり天保二年（一八三一）には、深刻さを増していたと考えられるのである。

尾道を代表する富商であり、町年寄でもあった橋本竹下は、天保八年（一八三七）にも、代官木村幾三郎宛に、三名の町年寄連名で、窮民救済のために米を安売りしてほしい旨訴えるなど（五七七―五七八頁）、尾道の町政に腐心していることが覗える。

その救済策のひとつが、慈観寺本堂の造営であった。『新修　尾道市史　第六巻』に「墓域は橋本氏一族のもののみを葬ってある」とされるように（七〇頁）、慈観寺は橋本家の個人的色彩の強い檀那寺であった。その造営に窮民を雇い給金を払うことで餓死者を出さなかったと言い伝えられている。

先にも述べたように、まさにこの慈観寺本堂の造営に取り掛かった年が、瘞紅碑の建立された年なのである。

このことから橋本竹下の碑文の最後に、成仏した後の平穏を祈る一節が与えられる心理は理解される。飢饉対策に寺の本堂の造営を思いつく彼の個人的な傾向性として、仏教信仰があったことはいうまでもないし、その場所的な背景として、多くの僧や尼僧が住み、数キロメートルの距離に八〇以上の寺が密集していたとされ、今日も古寺めぐりと称して石畳を敷き詰めて観光コースとする尾道における仏教信仰という土壌も忘れてはならない。

それに加えて、当寺の尾道という歴史的場所からも、「瘞紅」という心理が理解される。金持ち達の付き合いとして、また、高級な趣味としての詩文や文化的素養の訓練として、頻繁に行った活花の

会を取り囲んでいたのは、飢饉という現実であった。楽しんだ結果枯れた草花をただ捨て去ってしまうには、余りに厳しい現実が、そこにあった。そこで何らかの儀式を欲したといえるのである。

結び

さて、瘞紅碑は、このような、田能村竹田の個人的状況、すなわち、本来は尾道という場所とは独立の個の自己表現と、尾道という、本来は田能村竹田とは独立の場所の状況とが合致して成立したといえる。そしてそれらは、本来は独立でありながら、大きくは尾道に集約された場所のダイナミズムに拠るものだということも、考察してきた通りである。

碑の建立をだれかが持ちかけ、恐らくはすぐに賛成を得られたことが想像できる。賛成し建立したという事実は確固たるものだが、そのように至った経緯には、それぞれの複雑なダイナミズムがあった。これらのダイナミズムが必然的に結びついて、いまも、千光寺の鐘楼横に瘞紅碑は立っているのである。

今後は、小論の論旨を強化すべく、フィールドワークを含んだ調査を重ねることと、一般論としての場所論をより厳密に、諸例をもとにして考察することが課題である。

（あらき　まさみ　日本赤十字九州国際看護大学教授）

参考資料（初出順）

瘞紅碑碑文、広島県尾道市千光寺境内、天保五年（一八三四）
大分県教育庁管理部文化課編『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　詩文篇』大分県教育委員会、平成四年
西田幾多郎「場所」、大正一五年、『西田幾多郎全集　第四巻』岩波書店、一九四九年／一九八八年
中村元監修・峰島旭雄責任編集『比較思想事典』東京書籍、二〇〇〇年
大分県教育庁管理部文化課編『大分県先哲叢書　田能村竹田　資料集　書簡篇』大分県教育委員会、平成四年
宗像健一『大分県先哲叢書　田能村竹田』大分県教育委員会、平成五年
青木茂編『新修　尾道市史　第六巻』尾道市役所、昭和五二年
亀山士綱『尾道志稿』文化一三年、翻刻版＝備後郷土史会、昭和九年

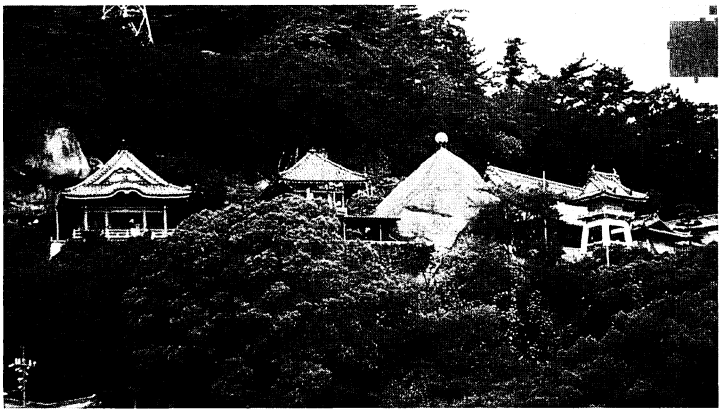

写真１　尾道市千光寺・中央玉乃岩右下に瘞紅碑

写真 3　千光寺道の田能村竹田像(矢形勇作「悠」1992)

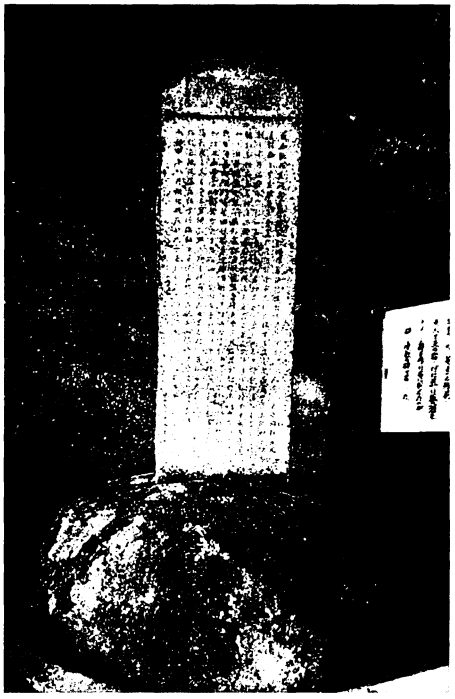

写真 2　尾道市千光寺境内の瘞紅碑

写真 5　慈観寺境内の橋本竹下墓所

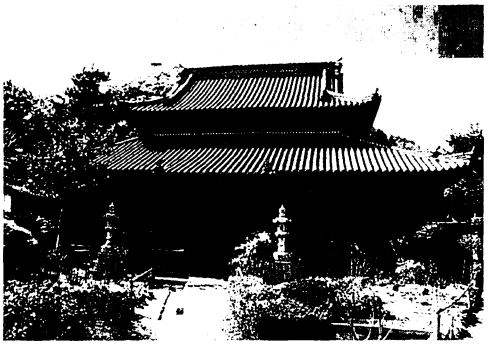

写真 4　尾道市慈観寺本堂